

HTLV-1のプライマーを使い、スクリーニングを行った。チンパンジー3匹(霊長類研究所で出生)、アカゲザル37匹(捕獲時の生息地;インド30匹、中国7匹)、ニホンザル152匹(捕獲時の生息地;兵庫県17匹、岡山県58匹、大分県77匹)から血液を採取、DNA抽出を行った。得られたDNAを100ナノグラムずつ使い、PCRを行った。その結果、HHV6とHTLV-1では全て陰性であった。しかし、EBVでは、ヒトのコントロールDNA(EBV陽性)では129bpに相当するバンドが見られるが、37個体に40bpのバンドが得られた(アカゲザル;インド21/30匹、中国3/7匹、ニホンザル;大分2/77匹、兵庫4/17匹、岡山6/58匹)。このことからヒトとはやや異なるEBV類似ウイルスの感染が示唆された。さらに、これらの個体の染色体標本において、EBV(EcoRI fragment)のコスミドプローブを使ったFISHにより、EBVゲノムの組込みを検討中である。

資料3

サルの歯の球間象牙質に関する形態学的研究

加賀山 学(東北大・歯)

球間象牙質は歯頸部象牙質に局在する特徴的な低石灰化領域で、個体間の差が大きく、加齢変化により減少すると考えられている。しかし同一個体から得られた歯牙での球間象牙質の局在についての正確な研究は行われていない。この研究では歯列完成期のサルの歯を用いて球間象牙質の左右歯牙間における対称性について検討した。

方法) ニホンザル(5~6才・オス)の上顎前歯を観察対象とした。10%中性ホルマリン溶液による灌流固定後、上顎前歯部について周囲組織を含めて摘出し、樹脂包埋を行った。ミクロトームを用いて研磨標本を連続的に作製し、カルボール・フクシン染色の後、光学顕微鏡にて観察した。各断面の画像を取り込み、象牙質全域に対する球間象牙質の面積比を左右歯牙間において比較検討した。

結果と考察) 球間象牙質の多くは歯頸部において確認されたが、個体差は認められなかった。球間象牙質の分布については左右歯牙間において類似していた。また球間象牙質の面積比は、左右歯牙間に明確な相違は認められなかった。今回の実験から球間象牙質の発生が偶発的ではない可能性が示唆された。我々は前の実験において球間象牙質の機能的役割について提唱した。本実験はそれを立証するための一つのトピックとなりえる結果が得られた。

資料4

ヒト及び猿類の咬合の三次元構造について

野間俊行(野間歯科)

報告書未提出。

資料5

チンパンジー放飼場における環境エンリッチメントとしての植物の評価

落合知美(京都大・霊長研・思考言語)

動物の飼育環境では、樹木が育ちにくいことが多い。これは、飼育面積が野生の行動域に比べて極端に小さいため、飼育環境に生育する樹木やその地面に負担がかかりすぎるのが原因である。特にチンパンジーは、樹木に「登り」「(葉や樹皮を) 食べる」「(遊具や道具に) 折り取る」な